

似たモノ  
さかし

似てるけどどこか違う  
似てないようでどこか似てる  
いろんな工夫や思いを映す  
みんなの所蔵資料

# 屋根から天空へ

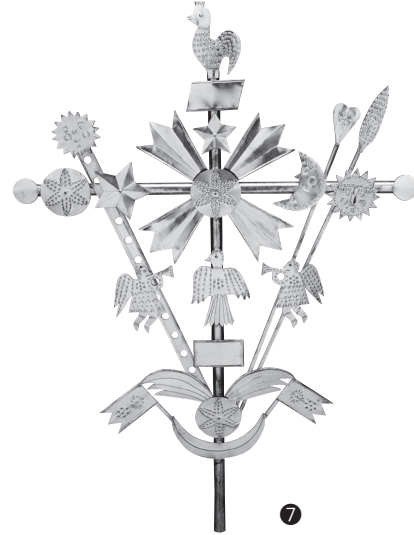
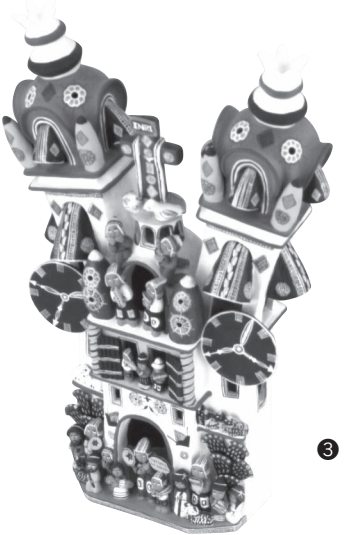
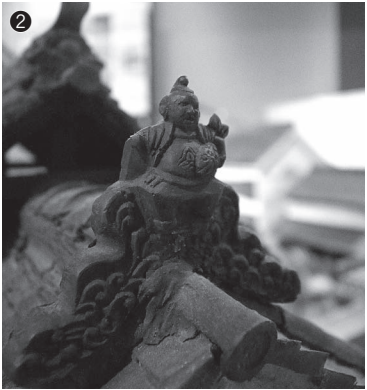
久保 正敏 ほくまさとし 民博 文化資源研究センター

一九二〇年代初頭のアメリカでは、アマチュア実験家たちが車庫や屋根裏で装置を自作し、音声の無線送受信を個人的におこなっていた。現在のアマチュア無線家の先駆である。やがて政府の管理下でラジオ放送制度が整備され、個人の自由な送信は抑制されていくのだが。そういえば、アップルの創始者スティーブ・ジョブズとスティーブ・ウォズニアクが、機関や企業のみが入手できた高価なコンピュータを個人に解放しようと、一九七六年に最初の商用パソコンを製造したのも車庫だった。車庫や屋根裏は、個人の自由を指向するモノ好きやメカマニアの男の城だったのだ。東京・三田の渋沢邸に建てられた車庫の屋根裏で、渋沢敬三、鈴木醇、宮本

璋ら中学校以来の友人たちが一九八一年ごろから収集し始めた動植物標本を収蔵する棚から始まる、と敬三自身が回顧しているアチックミュージアムも、そうした男の城が発点だったにちがいない。

であるならば、非日常的な隠れ家である屋根裏は、コレクターや好事家たち、そこを根城に前衛を作り出す場なかもしれない。それは屋根が家のなかでもっとも高い位置にあつて天や神に近い領域、あるいはそうした領域と現世との境界であるからだろうか。ちなみに『季刊民族学』七四号（一九九五年、千里文化財団）で佐藤浩司たちが語る

島に特徴的な、とんがり帽子のように棟の高く突きでた独特の家屋では、屋根裏は神に捧げられた空間だという。そうした目で見ると、屋根や破風に取り付けられるさまざまなモノには、共通点がありそうだ。家の高い位置に取り付けて、飾りも兼ねて超自然の存在にアピールし、家を守ってもらおう、あるいは、彼らと交信しようとするのだろう。魔除け、幟や鯉のぼり、あるいは超自然の存在に降臨してもらおう依り代のたぐいも、そのあたりが起源であるらしい。というわけで、特別展「屋根裏部の博物館」にちなみ、屋根に縁のある所蔵資料から、人びとが屋根から天空にかける思いを考えてみたい。



- ① 屋根飾り、ニューカレドニア（フランス領）、幅 18 × 長さ 106 × 高さ 4cm、H0125055
- ② 大和棟の 1/10 模型の屋根に鎮座するえびす様の鬼瓦、日本、H0009512  
本館展示場でご確認あれ
- ③ 教会の置物、ペルー、幅 40 × 高さ 63 × 奥行 20 cm、H0210703
- ④ 鬼瓦、日本、幅 51 × 高さ 30 × 高さ 43 cm、H0129205
- ⑤ 鯉のぼり、日本、幅 15 × 長さ 42 cm、H0119852
- ⑥ 住居用 裝飾板、インドネシア（民族：バタク）、幅 51 × 高さ 120 × 厚さ 7 cm、H0000201  
伝統的な家の前面のつき出した梁にとりつけられる
- ⑦ 屋根用十字架、ペルー、幅 72 × 高さ 101 × 厚さ 6.4 cm、H0210641  
新築の屋根の棟飾り
- ⑧ 倉庫の 1/3 模型の正面にある屋根飾り、ニュージーランド（民族：マオリ）、H0008069
- ⑨ 屋根用十字架、エチオピア（民族：アムハラ）、幅 13 × 高さ 33 × 奥行 13 cm、H0175111  
教会の屋根に置かれる

※寸法は計測時の最大値を示す。